沢田内科医院ニュースレター 第125号

PCRとワクチンの話　(澤田直也)

■9月の新型コロナウイルスの状況

これを書いている9月20日現在、全国的には第5波と呼ばれる感染流行期がやや収束に向かいつつあります。青森県でも八戸を中心に多数の陽性者が出たため、独自に公共施設や公園の閉鎖などの対策が行われました。青森県内においてはいまだ散発的にクラスターが発生しており、まだまだ感染が収まったとは言い難い状況です。

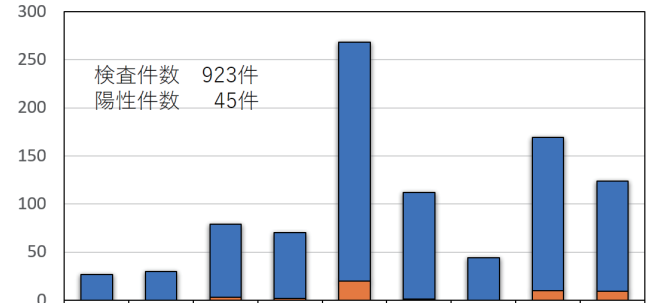
実際に診療していてもまだそこらへんにウイルスがいるような印象があります。それはあまりコロナの確率は高くないかなと思って検査した人からも、陽性者が出ているからです。こういう状況の時は検査をする敷居を下げて、発熱がなくても風邪症状のある方は積極的に検査するようにしています。

■沢田内科医院で9月までに検査した方は923人。そのうち45人が陽性。

これまで当院では発熱コールセンターや保健所、他院からの発熱患者の診察依頼を含め、**今年（1月1日～9月20日）だけで923人の検査**を行いました。保健所から濃厚接触者には認定されなかったけど、実際は近くにいた可能性がある方、「濃厚接触者の接触者」になって心配だという方もこられます。また、海外に行くために出国前のPCR検査の陰性証明が必要という方、職場や学校、保育園で陽性者が出たので不安だという方も検査を行っています。実際に症状がある方は医療として検査、治療を行いますし、そうでない方は自費診療という形で行っています。

今年9月までの検査で陽性だった方は45人でした。すべて鼻から綿棒を入れて調べる鼻咽頭ぬぐい液でのPCR検査です。陽性となった方は保健所に届け出を行い、保健所からの指示で大きい病院で検査をしてから宿泊療養か入院かが決まります。5月に検査件数が最多となりました。これは大きな事業所で陽性者が出て、まとまった検査が必要になったためです。夏休みの帰省やオリンピック・パラリンピックで人流が増えた影響か、7，8月も検査件数は多い傾向にありました。診療していて肌感覚として市中感染が続いているなと感じるときは、連日10件前後のPCR検査があり、そのうち1～2人が陽性となります。当院で陽性率10～20%のときは、弘前市内では10～20人の陽性者が出ています。

沢田内科医院の新型コロナPCR検査結果



	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月
陰性	27	30	76	68	248	111	44	159	115
陽性	0	0	3	2	20	1	0	10	9

■新たなPCR検査機器の導入

職場全体など人数が多い場合は院外の検査会社に依頼していましたし、10名以内であれば院内でPCR検査をしていました。院内のPCR検査は1回に4人分検査できますが、結果がわかるまで2時間かかります。そのため多くても1日に5回（20人）くらいが限界でした。そこで先月から新たにもう1台PCR検査の機械を増やしました。この機械は1回に1人分しか検査できませんが、**結果がわかるまで20分**とこれまでで一番早いです。20分でわかるということは、発熱があってコロナ以外の疾患で他院に依頼するときもスムーズになります。また救急搬送する時も、陰性とわかれば救急隊やご家族の方の安心にもつながります。院内に入ってもらって

採血検査やX線検査を行ったり、点滴したりするときにも職員や他の患者さんへの安全確保にもつながります。**新型コロナはそうであるとわかれば、治療の面でも感染対策の面でも適切な対応の仕方というのはわかってきています。問題は感染しているのか、していないのか、わからない時期です。**この時期を対応しなければならない医療機関としては、患者さんのためにも医療者のためにもできるだけ早く感染の有無を判別しなくてはなりません。今後もこの2台のPCR検査機器を駆使しながら、最前線での診療にあたっていきます。

左の白い機械では4検体まで検査できる。
右の小さい白い機械が今回新たに導入したもの。

■発熱外来では基本的に聴診は行っておりません。

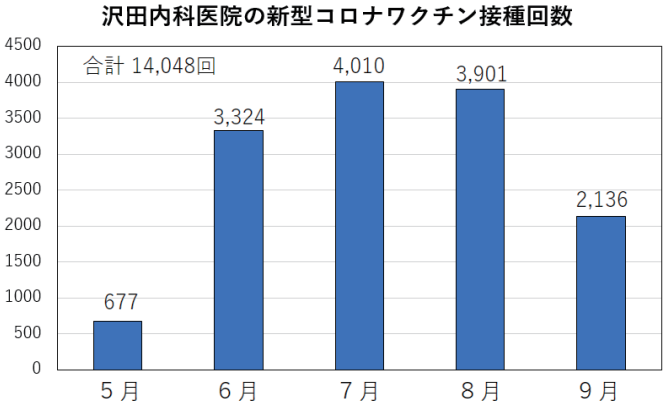
当院では発熱外来は診療時間内に（場所はわけていますが）他の診療と併行して行っています。医師は感染防護をして診療にあたっていますが、発熱患者さんとの接触は最小限にしなければなりません。新型コロナ肺炎は通常の細菌性肺炎と違って、聴診があてにならないことがわかっています。胸の音で肺炎の有無がわからないということです。もっと言えばレントゲン写真でもわからない肺炎がCTでやっとわかったりします。コロナで肺炎を起こしている方は血の中の酸素濃度が下がることが知られています。パルスオキシメーターは指に挟むだけで血の中の酸素濃度を間接的に測ることができます。前述の検査でPCR陰性とされるまでは、発熱患者さんはひとまずパルスオキシメーターで緊急性があるかどうかを確認して、その後の検査を進めています。

パルスオキシメーター。
黄色の数字が酸素濃度。水色の数字が脈拍。

■沢田内科医院でのワクチン接種は9月20日までで合計14,048回

最後にワクチンの接種状況についてです。当院では西目屋村、通院中の方、茂森新町と西茂森に在住の65歳以上の方から順に予防接種をはじめました。その後年齢制限がなくなり現在は12歳以上の方で接種希望のある方すべてを対象としています。**当院の接種回数は9月20日までで14,048回**となりました。午後まで診療のある日は130～200回、午後休診の日も待合室で集団接種のようにして、休み返上で予防接種をすすめました。結果として9月19日の東奥日報にもありました通り**ワクチンの2回接種率は、西目屋村で85.3%、弘前市で58.3％と全国平均（50.9%）や青森県平均（55.4%）を上回る接種率でした。**しかし、8～9月から全国的にワクチンの配分が減っています。当院でも9～10月はワクチン入荷がかなり少なくなっており、月に3,000～4,000人に接種できる能力はあるのですが回数的には減っています。青森県では10月に青森、八戸、弘前の合計で25,000人の広域集団接種を予定しており、当院でワクチンが手に入らなくなった場合は集団接種で受けていただくことになるかもしれません。割り当て分のワクチンについては、仮予約していただいた方を中心に順次予約を入れていきたいと思います。

これからインフルエンザの予防接種もはじまりますし、冬にくると予想される第6波ができるだけ小さく収まるように自分たちにできることをしていきたいと思います。



ワクチン接種は合計14,048回。

弘大医学部鵬桜会理事長　（澤田美彦）

弘前大学医学部の同窓会である鵬桜会の理事長に就任しました。この5月に西澤理事長と何人かの先輩の理事が退任することになりました。平成21年に理事になり活動してきましたが、名簿を見てみると何と私が最長老ということになり、鵬桜会総会で私が理事長に選任されたのです。

昭和19年に開校した青森医学専門学校は元々青森市にありました。それが昭和20年7月の青森空襲で青森市は焼き払われたため、昭和22年に青森医学専門学校は弘前市へ移転しました。そして、弘前医科大学を経て、昭和24年に新制弘前大学が発足するに伴い弘前大学医学部となりました。医学部同窓会が発足したのは昭和27年のことでした。この年は私が生まれた年なので69年前のことになります。昭和42年に法人化され弘前大学医学部鵬桜会となりました。事務局は弘大医学部創立50周年記念として建てられた医学部コミュニケーションセンター内にあります。

医学部メディカルコミュニケーションセンター

鵬桜会は荘子の「逍遥遊」の中にある漢詩から名づけられました。「北の溟に魚あり、その名を鯤となす、鯤の大きさその幾千里なるを知らず、化して鳥となる、その名を鵬となす」。そして、幾千里なる翼を持つ鵬は南の溟を目指して飛び立つのです。日本一の桜がある弘前で学んだ学生は、鵬のように世界に飛躍してほしいという願いを込めて鵬桜会と命名されたのです。ちなみに、私の母校である弘前高校の校章は、埋め立てられて南塘グラウンドとなった鏡ヶ池から飛び立つ鵬です。弘大には「北溟寮」という学生寮がありますが、その名前もこれに由来しています。

鵬桜会のロゴマーク

同窓会ですので卒業生に対して情報提供を行い卒業生の活動を支援することが最も重要です。しかし、全国に散らばっている卒業生に対して支援することには限度があり、現在は会報を発行することと卒業生名簿を作成し発行することの二つが主な活動となっています。もちろんこの世の中ですので、ホームページを通しても情報発信を行っています。医学部に在学する学生に対しては、新入生歓迎会、各種部活動への援助、医学祭、国家試験対策への援助などを行っています。また、弘前医学や青森県医学会などと連携を取りながら弘前大学と医学部への支援も行っています。

弘大医学部鵬桜会ホームページ

鵬桜会の会員は約4,800人で、青森県はもちろん東北地方、全国にいて活躍しています。しかし、同窓会活動はどうしても地元に残った人がその中心になってしまいます。そして、卒業して間もない若い人たちは同窓会に興味を示すことが少なく、年を取るごとに興味を示すようになるものです。今後も、卒業生だけでなく医学部の学生のためにも鵬桜会の活動を継続していきたいと思っています。

黒石病院からの研修医 萩野哲広 先生

沢田内科医院で8月23日~9月17日の4週間研修させていただいた研修医の萩野哲広と申します。元々沖縄での地域医療研修の予定でしたが、新型コロナウイルスの関係もあり、縁あって、こちらで学ばせていただくことになりました。当初は離島での医療を経験できないのは残念でしたが、今では沢田内科医院で研修することができて本当に良かったと感じております。（もう一回選べたとしても、もう一度沢田内科を選びたいと思うくらい良かったです。）澤田直也先生、美彦先生、スタッフの方々、何より患者さんとの出会いは私にとって貴重な財産となり、忘れられない思い出となりました。本当に感謝しております。

沢田内科医院の1日は朝から夕方遅くまで本当に多忙です。朝の入院患者の回診から始まり、たくさんの患者さんの外来、その合間を縫っての胃カメラ、大腸カメラ、エコー検査などなどやることはたくさんあります。先生やスタッフの方々は息つく暇もありません。私は直也先生と四六時中ともに行動させていただきましたが、直也先生はとにかくエネルギッシュでした。先生の診察や手技は丁寧かつ正確であり、一切無駄がありません。診察方法や考え方など毎回丁寧に指導してくださり、その説明がとてもわかりやすく、まるで直也先生の頭の中をのぞかせてもらっている気分でした。あまりにも直也先生の指導がわかりやすいため、最初は私も急成長できるとうぬぼれていましたが、それは大きな間違いでした。実際に患者さんの診察をさせてただくとその難しさを痛感するばかりでした。とにかく先生の知識、経験、思考回路は凄まじいもので私も少しでも近づけるようにこれからより一層努力しなければと毎日が反省の連続でした。「自分も年を重ねたら将来はここで診てもらいたいな」とつい考えたりもしましたが、そう思われるような医師に自分がならねばと我に返りながら先生を見ていました。本当に尊敬できる先生でした。

私のような新米医師はまず大きな病院で経験を積むことが一般的です。そこで医師に必要な多くの知識や手技を学びますが、患者さんをその瞬間、「点」でしか見ることができません。しかし、沢田内科医院では患者さんと日々の生活・人生を共に歩んでいるため「線」で見ることができます。だからこそ、的確で柔軟な医療が提供でき、信頼関係が築けるのだと感じました。澤田直也先生や美彦先生を見ていて私は、自分が幼い頃に憧れていた医師像を思い出しました。実際に医師になり、いざ良き医師になろうと知識や手技を会得しようと励んでいたつもりですがどこか純粋な気持ちを忘れていたかもしれません。患者様に慕われる先生方の姿を見て、自分もこんな医師になりたくて、人の役に立ちたくて医師になったんだと振り返ることができ、改めて自分の目指したい医師像について考え直す機会ができました。

現在も新型コロナウイルスは人々に多大な影響を与え、医療現場は毎日が戦いです。そんな中でも沢田内科医院では、地域のためにワクチン接種や発熱外来を率先して行っています。それは直也先生・美彦先生をはじめ、スタッフの方々の熱い思いが原動力となっているからこそできることです。私も一日でも早く一人前の医師となり、この尊敬すべき方々のように人の役に立てる医療従事者になりたい所存です。本当にありがとうございました。

発　　行：　〒036-8261 青森県弘前市茂森新町1-6-4　沢田内科医院　院長　澤田直也
ホームページ：　https://www.sawada-naikaiin.com/　TEL 0172-37-7755　FAX 0172-37-7788